



Ts転生

～神様転生したら貞操観念
ゆるゆるの世界で女にされた件～

もちもち堂

「…あれ？ココは何処だ？
俺は何をして」

「おや、目を覚ましたみたいだね」



上下の無いような不思議な空間。

目の前には体全体がぼんやりとして、輪郭も
はつきりしない何かがそこにいた。

「うおっ！な、何なんだお前！
それにここはどこだ!？」



「まあ、落ち着きなよ。
君の質問に分かりやすいように
一言で言えば神様転生というやつだ」

「……は？」

「君の世界にはそういう書物があるのだから？
今の状況はつまりそういう事だよ」



あまりの突拍子のない話に馬鹿馬鹿しいと
一蹴しようとするも、目の前のこいつから発せ
られる雰囲気には圧されるように否定的な言葉が
だせなくなる

「さて、テンプレではあるがここは神様らしく
君の願いを一つ、なんでも叶えてあげよう」



神様というのは到底信じられないが、
このよく分からない存在の機嫌を損ねる
のは危ないような気がする。

「……なんでもいいんだな？」

「ああ、もちろんだとも」



俺は慎重になりながらも自分の願いを口にした。



突然だがどんな願いでも叶えてくれると
言われたら何を願うだろうか？

大抵の男は金か女だと思う。

俺もそれに違わず欲望に忠実なままの願いを
した。

：だけど、こんな事になるなんて俺は思いも
しなかったんだ。

「…確かに言ったださ。貞操観念がゆるゆるのセックスでまわる世界に行きたいって…!」
「けど、女になって行きたいなんて、一欠片も思っ
てねえよ!」



「クソっ！服まで女物にしゃがって！
変なところで気が利いてやがる！」

あの自称神様はサービス精神旺盛なのだろう。
着ている服も女物に変わっていた。

だがこんな事を気にするよりも、もっと別のことに
気遣って欲しかった。



「あの、大丈夫ですか？」

「へ!?!いや、その…っ!?!」

「あ、すみません行き成り。
でも…その、何か困ってそうだったので…」

「……」



突然声をかけられ、あたふたしている俺に苦笑しながらも優しく話しかけてくれる男。

これが俺とコイツ…裕也との出会いだった。



あれから何処にも行くあてのなかった俺は
志穂と言う偽名を語り、裕也の家に居候させて
もらっている。

初対面の相手を簡単に家に泊めるなんて、かなり
お人好しな奴だと思うが、そのおかげで生活出来
るのだ。正直感謝してもし足りない。



彼のいない時間帯にネットでこの世界について調べて分かった事だが、どうやら自称神様は一応願いを叶えてくれたようだ。

この世界では女の性欲はかなり強く、求められれば誰とでもセックスするのが普通らしい。

まさに夢のような世界だ。



「まあ、俺は女になっているから何の意味もないんだけどな」

そういう意味では裕也はこの世界ではかなりの異端のようだ。

周りには女の影もないし、俺に対しても特に何かしてきたりもしない。

所謂、俺の元いた世界の『普通の感性』というやつだ。





「裕也に会えたのは幸運だったな。

もし会えていなかったらこの世界じゃ体も売る
事もできないし、ホームレスになるか女好きな
奴を見つけて媚を売るしかなさそうだしな」

「体はともかく心は男なんだし流石にそれは
嫌だしな」

この時までは俺は自分が『この世界』の女になっ
て
いるという事をたいして深く考えていなかった。



「…っ♡くそっ、なんでこんなにしてるのに
手が止まらないんだよっ♡」

「はあ♡はあ♡…んっ♡あっ♡ああっ♡」

くちゅ

くちゅ

んっ♡
んっ♡

んっ♡
んっ♡

「ダメだっ♡これ気持ちよすぎて…っ♡」

俺は裕也がいらないのをいいことに裸で自慰行為を繰り返す。

あまりの気持ちよさに口からは甘い吐息が漏れてしまう。



「♡あ、ああ♡ゆ、裕也あ♡」

体が女になった影響か、何故か女では興奮できなかった俺は裕也の事を思いながら自慰に耽ってしまう。
くちゅ

はっはっ...

はっはっ♡

んっ♡♡♡



「ふぁ♡これ、す♡♡裕也、気持ち良いよぉ♡」
だが自分で慰めてもムラムラが収まらない。
発情した体を鎮めるように俺は何度も自慰を
続けた。

くちゅ

どれくらいそうしていたのだろう？
気づいたら目の前で佇む裕也と目が合う。

はっはっ...

はっはっ♡



「あ、その、「めん」

裕也は頬を赤くさせ、顔を逸らしながらも申し訳
なさそうにそう言った。

俺は恥ずかしさのあまり顔が真っ赤に染まって
しまう。



「…み、見てたのか？」

「その、俺の名前を呼びながら苦しそうな声を出していたから何事かと思ってつい…」

「……っ！」

おっ
おっ
おっ



（見られた！裕也の名前を呼びながらオナニーをしているところを見られたっ！）

恥ずかしさで顔を逸らそうとした時、裕也の股間が痛そうなほど勃起しているのに気づいた。



「…なあ、俺のオナニー見てそんなにしたのか？」

「う、うん」

「そ、そっか…。まあ、裕也も男だし仕方ないよな。
俺もこんなところでしてたのも悪いんだしな…」



「けど、俺ばかり恥ずかしい思いをするのは不公平だからな。お前も同じ思いをさせてやるっ」
俺は恐る恐るそれに触ると勃起したそれをズボンから取り出した。









「んっ♡れる♡ちゅぷ...ちゅるっ♡んぷっ♡
すっ♡舌の上で血管がビクビクって
脈打ってる♡」

「...♡し、志穂っ♡」

「んっ♡
んっ♡」

「んっ♡
んっ♡」

「んっ♡
んっ♡」



「あむ♡ちゅる♡れる…♡れるお♡」

「……なんで俺、男のチンポ」んなに必死に舐めてるんだろ？」

（相手が裕也だからなのかな？それとも俺が…）

はーん♡
はーん♡

はーん♡
はーん♡

カッ
カッ

思考を巡らせながらも舌は勝手に動いて的確に裕也の弱そうなところを責める。

裕也が俺の行為で気持ちよさそうな声を上げるのが無性に嬉しくなり、より気持ちよくなるように積極的に舌を絡める。

いっ……いっ……
ん……ん……

元々自分に付いていたモノだ。
何処を刺激すれば気持ちよくなるかなんて簡単に分かる。





「そ、そんなに舐められたらっ！」

（…あ♡口の中ですよ！）いびくびくしてきた♡）

「忘穂っ！」「めん。もう、でるっ！」

いびく
いびく
いびく

いびく
いびく
いびく

舌の上で肉棒がぶるりと震えると大量の精液が口の中に広がる。

「んっ！んっ！んく…んぐ、こくっ♡」

口の中に出された精液を味わうように舌先で救い上げゆつくりと飲み込んでいく。

ぐんぐん

んっ！んっ！んく…んぐ、こくっ♡





「志穂、おれ、まだ……」

「……たく、仕方がないな、ほら♡」

漂う異常な雰囲気、飲まれるように俺は裕也の
求めを受け入れてしまった。

「は……は……♡」

♡♡♡♡♡





食い入るような目で俺の秘所を見つめる裕也。
自分から受け入れるように股を広げたが、
流石にこんななにじつと見つめられると羞恥で
顔が火照ってしまう。

「うう、恥ずかしいんだからあんまりジロジロ
見んなよ」

「あ、ごめん。その、綺麗だなんて…」

「は!? おまつ?! いきなりなに言っただけでやる!」

「ご、ごめん! ……それじゃあ、入れるよ」

「……おつ」



「…っ♡」

愛液でトロトロに濡れた秘所に肉棒の先端を押し付けられ、こちらを気遣うようなゆっくりとした動きで挿入される。

ズブズブと異物が膣内を押し広げるように入ってくる感覚。

鈍い痛みが体を襲うが、それ以上に脳を焼くような強い感覚に体は軽くイってしまった。

んっ♡

はっ♡
はっ♡



「志穂、大丈夫か？」

「んっ♡俺に構わなくていいから好きに動いて
いいぞ♡その、俺もちゃんと気持ちいいから…」

「…っ！」

んっ♡

んっ♡
んっ♡
んっ♡





肌がぶつかり合い、奥まで突き上げられる
ような動き。

先程までの優しい動きとは正反対な激しさに
頭の奥がチカチカとしてしまう。

すぽん
すぽん

んん

んん
んん



「ひぐうつ♡あ、あつ♡これ、すごい♡
気持ちいいのが頭の天辺まで来てっ♡」

「はあ、はあ♡ん、んっ♡ど、どっしり♡
こんなの知ったら俺、はまっちまうよお♡」

すっぽろ♡

あゝ♡
あゝ♡

あゝ♡
あゝ♡



「ガチガチちゃんぽで中ぬぶぬぶ擦られて…っ♡
あ、あ、あ♡まだ痛いのに気持ちよすぎて
イクの止まらないっ♡」

「もっと♡もっとしてくれ♡裕也のおちゃんぽで
オマンコずぽずぽしてえ♡」

ずぽずぽ♡

あ、あ♡
あ、あ♡

あ、あ♡
あ、あ♡



「あはっ♥奥にコツコツって当たってきたあ♥
これ子宮口だよな？はは、精液欲しいって
子宮降りてきたあ♥」

すぽろ♥
すぽろ♥

んん

んん
んん
んん

「っ♥中でビクビク震えて…っ♥なんだよ
そんなにココに出したいのか？」

そう言う俺は自分の子宮の辺りを擦る。

それに反応するように裕也の肉棒は膣内で
びくりと跳ね上がる。

今更だが生でやっているので妊娠してしまう
かもしれない。だが、今の俺の頭には、ただ気持
ちよくなることだけしかなかった。

すぽっ
すぽっ

んん

はっ
はっ





「ふふ♥いいぞ♥」のまま「番奥で」エビエ」エ
って出しちまえ♥」

「…っ…志穂…出すぞっ!」

びゅるるるるっ…

すけ
すけ

ちゅ
ちゅ

ちゅ
ちゅ

「ふあっ♡あ、あああっ♡でてるう♡裕也の
あつつい精液が奥でビュルビュルでてるう♡」

「ひああ♡中でビチャビチャ広がってるの
気持ちよくてオマンコキュンキュンって
喜んじゃってる♡」

「あ、ああ♡どうしよう、もうこんなの覚えたら
止められない……っ♡」

あゝ
あゝ

あゝ
あゝ



「んっ♡あっ♡お、おおっ♡おひい♡」

裕也の上に跨り艶声を出しながら自ら腰を振って淫らに喘ぐ。

その姿は他人から見たら発情した雌にしか見えないだろう。

あんなに
淫らな
姿は
初めて

んっ♡

あっ♡

お、おおっ♡



最初の頃は普通にセックスをすれば満足できたが、この世界の女の体になったせいか、日々性欲が強くなって彼を求める回数が多くなってしまっていた。

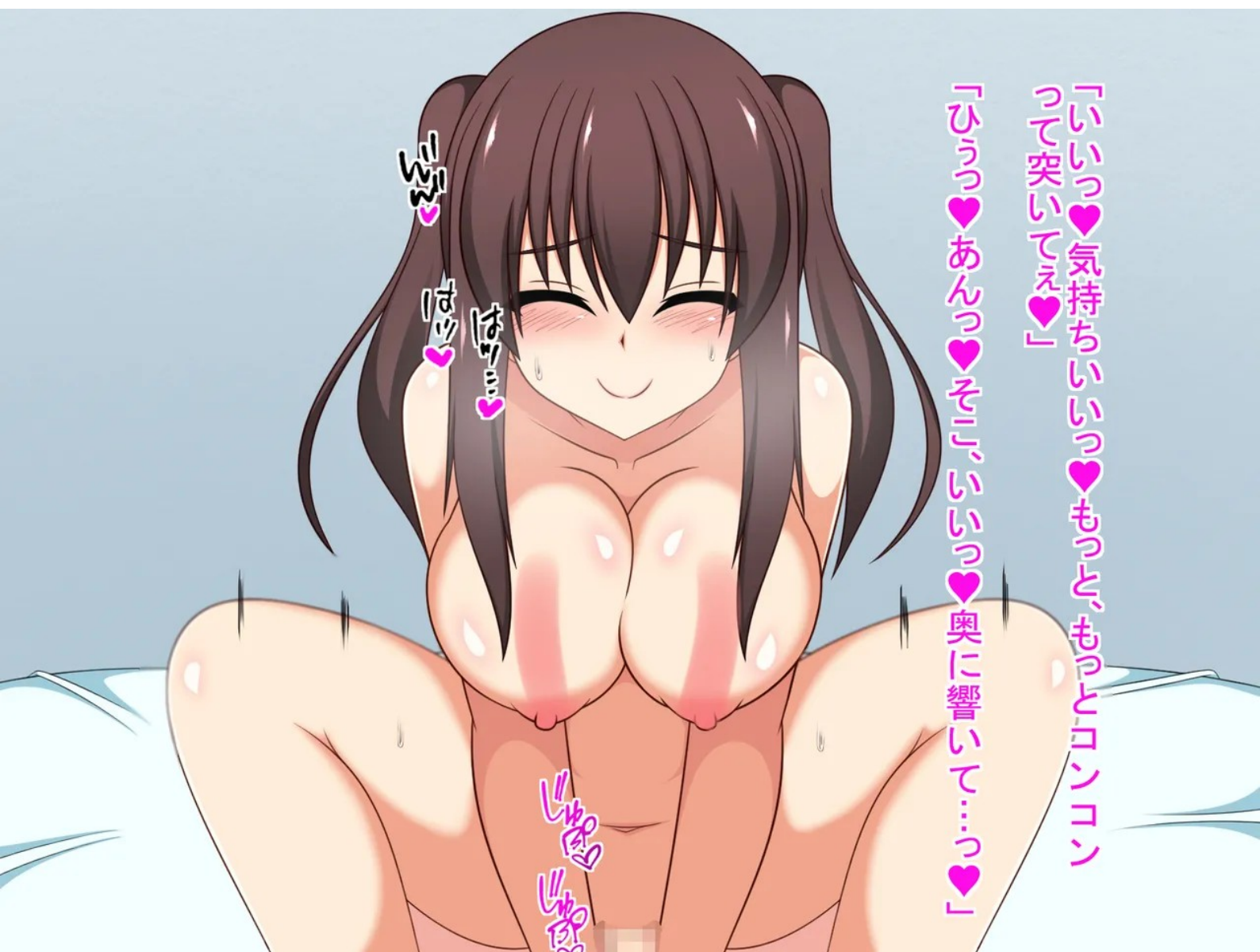
裕也も仕事で疲れていると分かっているのにそれでも俺は彼を求めてしまう。



あははははは

「いいっ♡気持ちいいっ♡もっと、もっと♡コンコン
って突いてえ♡」

「ひゅっ♡あんっ♡そっ♡いいっ♡奥に響いて…っ♡」



激しく腰を振るとそれに応えるように裕也も腰を突き上げてくる。

波のように襲う快楽に俺の男だった部分が流され、ただの雌のように子宮口は肉棒に吸い付き射精を促す。

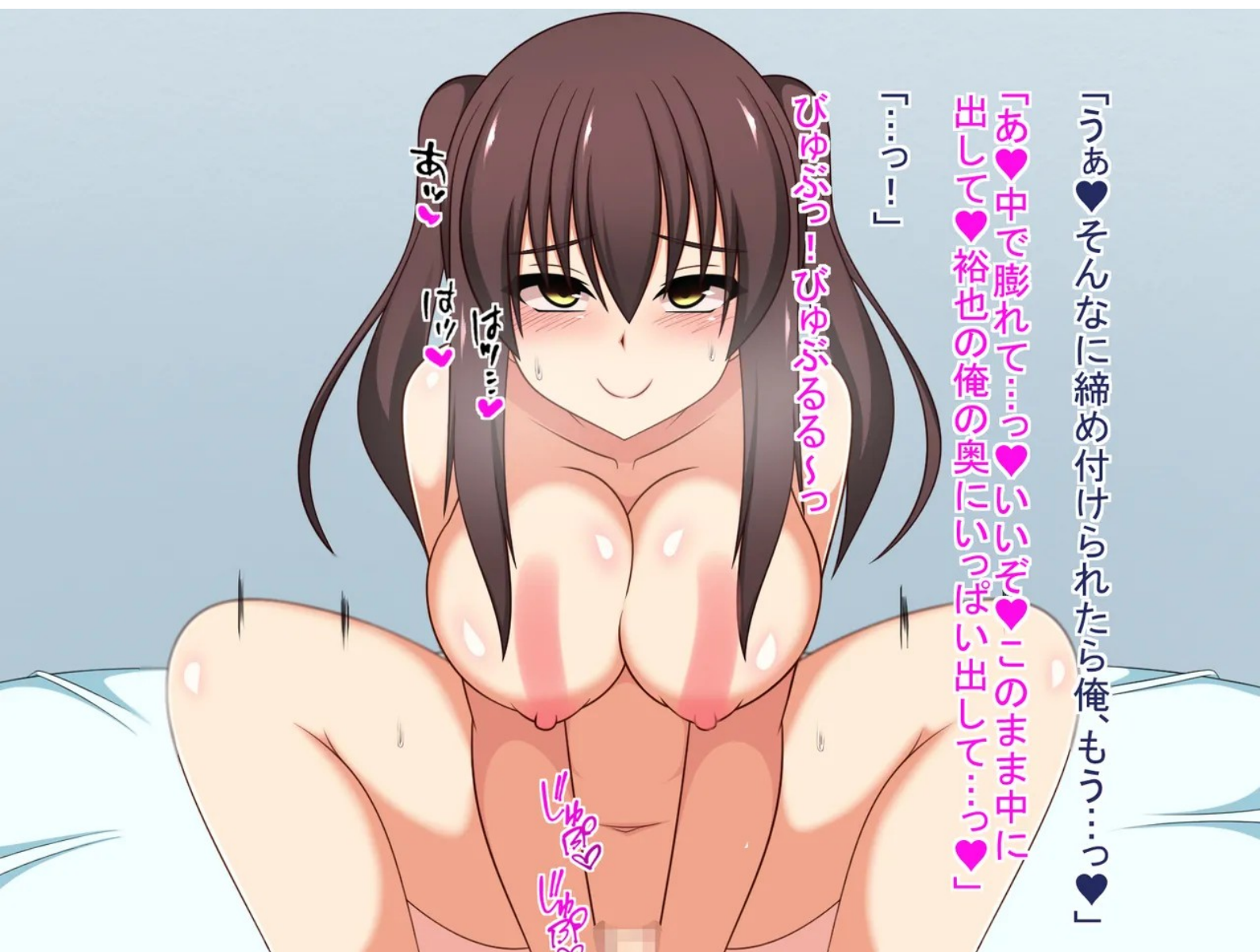




「...」

びゅぶっ！びゅぶるるっ

11/13



「ひゅっ♥でてるっ♥プリプリの精液が子宮内にビュクビュクってでてるっ♥」

脳を焼くような激しい快樂。

俺はさらにそれを求めるように再び彼の上で激しく腰を振る。

俺たちはお互い蕩けるように何時間も求め激しく愛し合った。

はっ♥はっ♥

あゝ♥



「…ふう。凄い倦怠感だ。志穂もきもちよかった？」
「うん、すぐかった♡」





余韻に浸りそんな話を話しながらも俺は自分
の中の何かが変わってきているのを自覚する。
言葉遣いもそうだが自分の内側が少しづつ女
のように変わって来ているのだ。

この世界で生きていくという意味では良いこと
なのだろう。俺も女として生きていく事にはもう
納得している。

でも、不安な事もある。
それはこの異常ともいえるほどの性欲だ。

…いや、この世界ではこれが普通なのだ。
だからこそ知らない相手とも簡単に
セックスをする。

(…このまま性欲が強くなって
いったら俺もそうなるのかな?)



「…志穂？どうした？」

「ううん、なんでもない♡」

不安をかき消す様に頭を振る。

今は彼が傍にいてくれるただそれだけを
喜んでおこう。

ん…



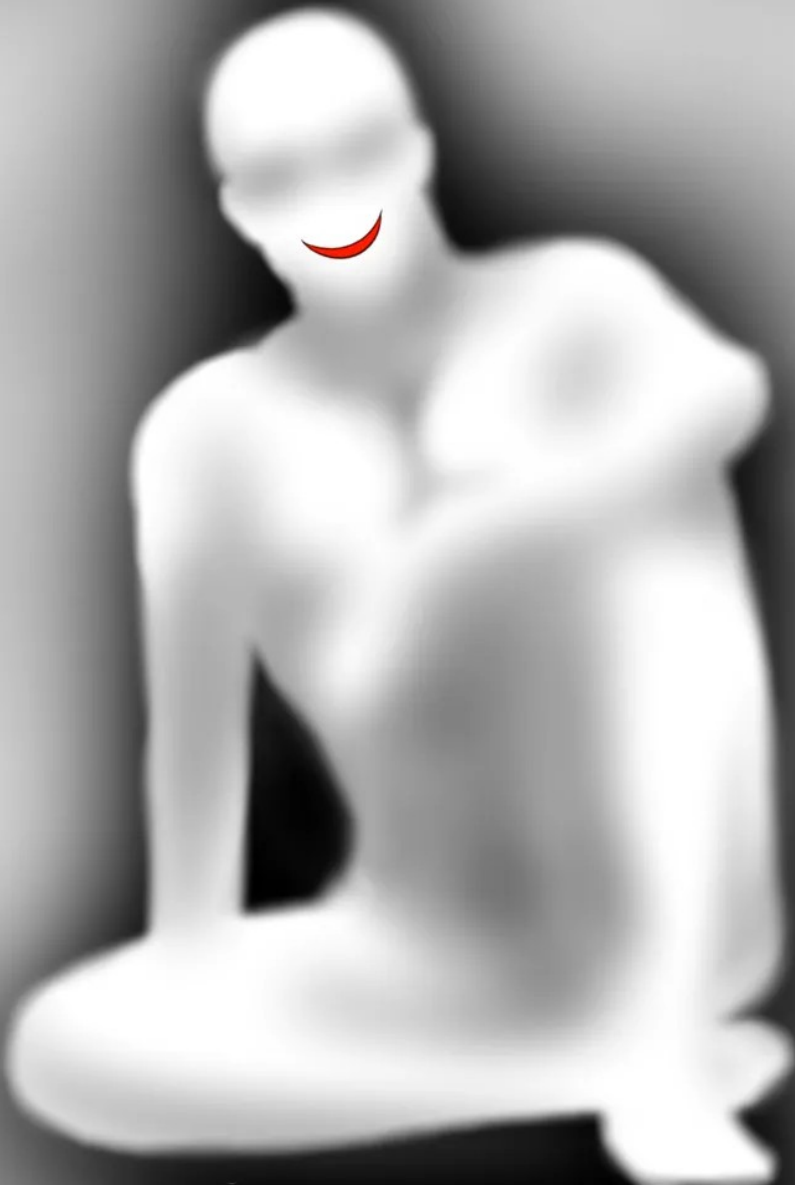
「…はは、比較的綺麗な終わり方だったな」

「彼…いや、彼女の物語はまだまだ続くだろうけどとりあえずはこれでお終い……」



「……」

「……何？まだまだあるだろう？
確かにそうだけどここから先は
自己責任でお願いするよ」



「んっ♡はぁ♡はぁ♡あ…あぁっ♡」

「うは♪おっぱいすげえ柔らかええ♪ブラも付けないで外歩いてるなんて、こんなの犯してくださいって言うてるようなもんだよな」

ぐにゅ…

ぐにゅ…

はっ…はっ…♡

はっ…はっ…♡



「俺、何でこんな事してるんだっけ？」

ホテルの一室で俺は会ったばかりの男に胸を揉まれている。

慣れた手つきで弄られ口からは甘い吐息が漏れてしまう。



（いや、原因は分かっている）

（裕也が仕事で家にいない間、セックスできないのがキツくて気晴らしに外をフラフラ歩いて時ナンパ目的のこいつに捕まって此処まで連れてこられたんだ）



（なんだ結局ここに居るのは俺のせいかな）

（抵抗も何もしないでついて行っただし、そりゃあこの世界ならしても良いって合図だもんな）

（ごめんな、裕也。でもこれはオナニーみたいなものだから...だから許してくれるよな）





「ほら、もっと舌を出して。べろちゅーしよっぜ
べろちゅー」

「んむっ♡あむ…ちゅ、れる♡」

男の舌が口の中を蹂躞するが俺は抵抗せずに
ただそれを受け入れる。



ピチャピチャと粘液の交じり合った音が部屋に響く。

ガチガチにそそり立った肉棒をお腹に擦り付けられながら舌を貪られ俺の体は簡単にでき上がつてしまった。

はっ♡

はっ♡

はっ♡

ちゅ

はっ♡



はっはっはっ♡

はっはっ♡

(裕也以外とキスしてるのに俺、気持ちよくなっちまってる♡)

(こんなの、もう我慢できるわけないっ♡)

ちゅぽ

ちゅ

「ん、あ♥ああ♥みちみちって広がりがら入ってくる♥」

「ひぐうつ♥奥まで押し開かれてっ♥ああこれだめっ♥おかしくなるっ♥」

「あんっ♥いつもと違う場所にゴリゴリ当たってんっ♥こんな熱くて硬いので中挟られたら膣内の形戻らなくなるっ♥」

むーや

はっはっはっ

はっはっはっ





（ふあっ♡深い所、ズンズンってされて頭真っ白になるっ♡うあっ♡体が勝手に…っ♡ひうあああ♡イクの止まらないっ♡）
（なんで、こんな弱いところばかり的確に…っ♡）

♡にめ

♡ははは…♡

♡うーや

「ははっ♪トロトロまん」気持ち良いっ♪」

「志穂ちゃんって言うんだっけ？君、滅茶苦茶名器だね♪チンコに絡み付いて放してくれないよ」

「い、言っなあ♡んっ♡あ、ああ♡」

むーや

ははっ♡
ははっ♡

あはっ♡



「っ！締め付けが強く…っ！このまま中に
出すからな！」

「あ、待ってっ♡中は…っ♡」

びゅぶるるっ！

「ん、んんっ！子宮にビチャビチャ出されてる♡
あ、ああ♡他人チンポで中出しされてイッてる♡」

んんん♡♡

むーや

は♡は♡

あ♡♡



「やべえな、君の体気持ちよすぎてハマっちゃったかも。なあ、これからもうっぱい抱いてやるからまた会おうぜ」

「はあ……♡はあ……♡」

コクリと首を縦に振る。俺は激しい絶頂の余韻でただそれしかできなかった

はあ♡

はあ♡
はあ♡

むーや

はあ♡

はあ♡



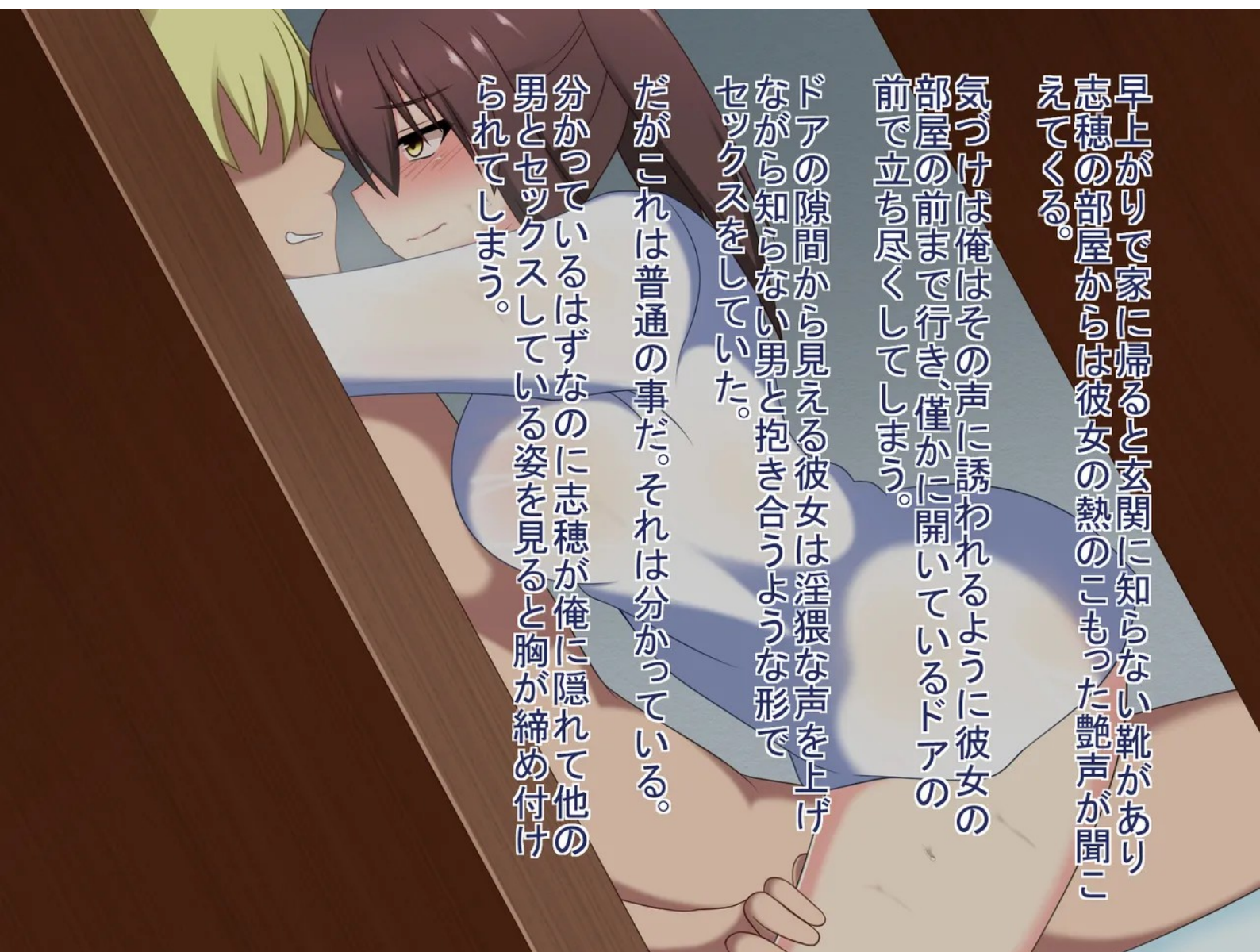
早上がりで家に帰ると玄関に知らない靴があり
志穂の部屋からは彼女の熱のこもった艶声が聞こえてくる。

気づけば俺はその声に誘われるように彼女の
部屋の前まで行き、僅かに開いているドアの
前で立ち尽くしてしまう。

ドアの隙間から見える彼女は淫猥な声を上げ
ながら知らない男と抱き合うような形で
セックスをしていた。

だがこれは普通の事だ。それは分かっている。

分かっているはずなのに志穂が俺に隠れて他の
男とセックスしている姿を見ると胸が締め付け
られてしまう。



「腰をグリグリ押し付けて来てそんなに俺と
したかったのかよ。モテる男は辛いね」

「はっ！馬鹿か。お前なんてただの性欲処理の
肉パイプだよ。それ以上の感情なんてさっぱり
ないね」

はっはっ
♡♡

むーや

♡♡
♡♡
♡♡



「え、そんなこと言っても体はこんなに俺の
こと喜んでくれてるぜ」

「んっ♡ああ♡チンポが中でうねって…っ♡♡ひう♡
何でお前みたいのがこんなにセックスが上手い
んだよ♡」



しゅっ♡
しゅっ♡

むいっや

はっ♡
はっ♡



「志穂ちゃんが可愛いからもっと頑張りたいくなるんだよ」

「…っ♡馬鹿な」と言うなっ♡」

「恥ずかしがっちゃってホント可愛いな♪」

「ほら、舌出して。ぺるちゅーしながら子宮口突いてやるよ♪」



志穂は言われたままに舌を出し。ピチャ。ピチャと絡めながら男と貪りあう。

それは俺とのセックスの時よりも激しくまるで動物のような交わり合いだった。



「あゝ、膣内キュンキュン締め付けてきてスゲー
気持ちいい。やべえ、もう出ちまいそう」

「おいバカ！中に出すなって毎回言ってるのに♡」

「わりい、もう無理」

「……っ♡」

はっはっ♡

むっ

しゅっ♡
しゅっ♡



（んんっ♡体押し付けられながら一番奥で出されてるっ♡）

（あいつ以外の精液が中に入ってるのに体が喜んで子宮口がコイツのチンポに吸い付きちゃう♡）

んんっ♡

んんっ♡

んんっ♡

んんっ♡

むっ♡

んんっ♡



「クソ野郎っ、こんなに出されたら本当に孕んじまうだろうがっ!」

「良いじゃねえか別に。大好きな彼氏の子として産んじまえばさ」

「...と言うか、誰かの子なんて気にする奴なんて滅多にいないぜ。子供は天からの授かりモノだからな。誰の種だろうが孕めばお祝い事さ」

「それに志穂ちゃんの子宮だつてこんなに嬉しそうに吸い付いて放さないんだぜ。合意みたいなもんだる?」

「♡そんな訳あるか...っ♡」

むいっ♡

はっ♡
はっ♡

だん...



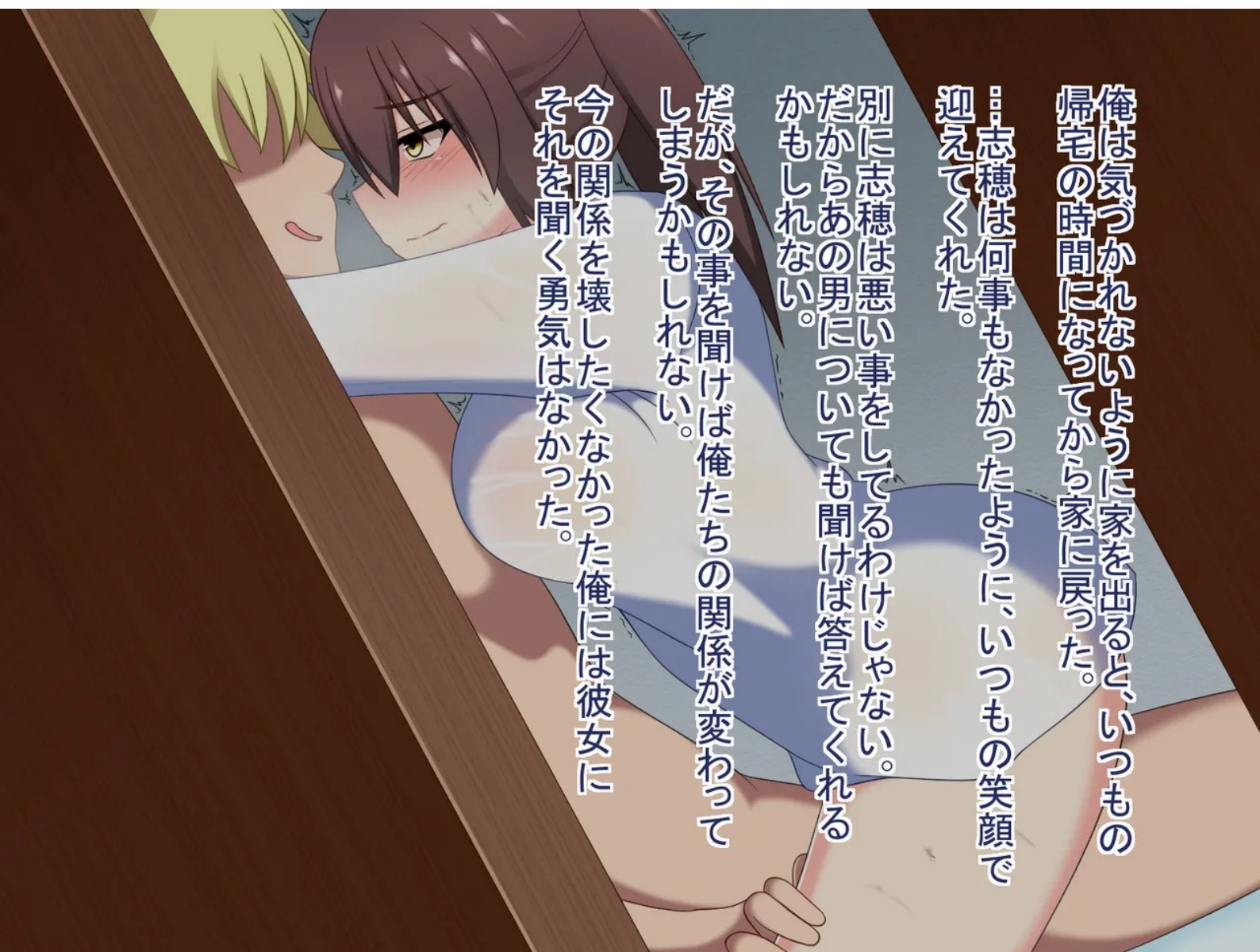
俺は気づかれないように家を出ると、いつもの帰宅の時間になってから家に戻った。

…志穂は何事もなかったように、いつもの笑顔で迎えてくれた。

別に志穂は悪い事をしてるわけじゃない。だからあの男についても聞けば答えてくれるかもしれない。

だが、その事を聞けば俺たちの関係が変わってしまうかもしれない。

今の関係を壊したくなかった俺には彼女にそれを聞く勇気はなかった。



「えーと、どういうこと？」

いつもの男が何の説明もせずに家に知らない
おっさんを連れてきていた。

「いやー、俺の親父に志穂ちゃんの事話したらさ、
興味持っちゃって着いて来ちゃったんだよ」

「まあでも一人増えるぐらい別にいいよな？」



「お嬢ちゃんのせいで、こんなになっちゃたよ
これどうしてくれるんだい？」

おっさんはそう言つとビクビク脈打つ肉棒を
俺の前に付き出す。

むせ返るような雄の臭いに意識が朦朧とし、
体が勝手に反応し濡れてきてしまう。

俺は恐る恐るそれを胸で挟み舐め上げる。



「ほら、ちゃんと胸と舌を使って！
それに言葉使いももっと女の子らしく！」

「何で俺がこんな事…」

「ほら！文句を言わない！」

「ひあっ！」

パチンと尻を叩かれ、有無を言わせない男の顔
に恐怖心が心を満たし俺は言われるがままに
してしまう。



「んっ♡れろっ♡んく♡じゅぽ♡」

まるで雌が雄に媚びるように胸と舌を使い
丹念に奉仕する。

たうたあれだけで怯えてしまうだなんて
もう俺の中の男は死んでしまっているのだろう。



「んっ♡んぶ♡ちゅ…ちゅる♡れろ♡あむ♡」

「お、なんだやれば出来るじゃないか」

「…こんな事で褒められても別に嬉しくないのにゴツゴツしたのが舌の上から伝わって…っ♡」

「んく♡裕也と違う形を無理やり覚えさせられているみたいだ♡」

いっ♡ちゅ♡
いっ♡ちゅ♡

むにっ

むにっ

んっ♡…♡
はっ♡…♡
はっ♡…♡



（あゝっ！くそっ！なんでこんなおっさん相手に
してあげたくなくなっちゃってんだ俺は！）

（あっ♡また膨らんできたあ♡そんなに俺の口
が気持ちいいのかな？）

すぽっ♡
すぽっ♡

むにっ

むにっ

んっ♡
はっ♡
はっ♡

（…こんなに気持ちよさそうにしてるなら、もっと
してあげないと可愛そうだよな？）

俺は深く咥え込むとまるでオナホールのように
口全体を使って肉棒を刺激する。





「んっ♡ちゅぶ♡ちゅる♡じゅぶ♡じゅるっ♡
んちゅ♡れる♡あむ♡ん、じゅる♡じゅるる♡」

「うお！急に激しく…っ！いいぞ、そのまま…っ！
…っ！だすぞ！」

びゅるるっ！

すぽ♡
すぽ♡

むにゃ
むにゃ

ん…♡
は♡
は♡

「んくっ♡んぶっ♡んん…んっ♡ごくっ♡」

ビクンビクンと震え喉の奥に叩きつけるように射精される。

口の中はおっさんの臭いで充満し頭の奥まで犯されるような感覚に俺はイってしまう。





壁に押し付けられたままガチガチにそそり立つ
肉棒を後ろから挿入される。

俺の膣肉は何の抵抗もなくズブズブと肉棒を
受け入れ、喜んで愛液を溢れさせてしまう。

すげー

はぁ...♡

はぁ♡

はぁ♡

むっ

ぐっ...♡

ぐっ...



獣のように後ろから激しく犯され、部屋中に
パンパンと肌がぶつかり合う音が響く。

あまりの激しさにもはや裕也のことを考える
余裕すらなく。気づけば自分から腰を突き出して
しまっていた。





「ほら、中に出して欲しいんだろ？
正直に言わないともう止めるぞ？」

「うっ…まって…言っ、言っから止めないで…」

うっ…

うっ…

うっ…

うっ…

うっ…

うっ…

うっ…

うっ…





「ひうつ♡イ、イってる♡濃い精液奥に出されて
イチやってるう♡」

子宮の奥にぶつかるように大量の精液が射精
される。あまりの熱さと濃さに体がビクビクと
痙攣してしまう。

(裕也、ごめんなあ♡おれ…わたしもう…っ♡)

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ぐわっ…

ぐわっ…

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡



最近、志穂の言葉使いが女性らしくなって来た。
自分の事を俺と言わなくなったし、所々の所作
も女らしい。

何で今更かと聞いたらその方が普通でしよと
返されてしまった。

普通……。

そう、この世界ではそれが普通なのだ。

初めて会ったとき、志穂は何故かそれに染まっ
ていなかったが、最近の彼女は徐々に変わって
きている気がする。

そう世間一般の普通に。



だがそれでも彼女を好きだという俺の気持ちに
嘘はないし、彼女も俺を愛してくれているという
のは伝わってくる。

今の俺のこの心を占めるモヤモヤとしたモノ。
彼女を独り占めしたいという気持ちは贅沢な
ことなのだろう。

彼女が普通になるといふのなら俺も選ばなくて
はいけない…。



「……志穂」

「うお！彼氏さんが来たのか。ちーす彼女さん
借りてますよ♪」

「んっ♡あ…裕也あ♡」

「おお！急に締め付けが良くなったな。
彼氏に見られてそんなに嬉しいんだな」

「ならもっと喜ばせてやんないとなっ！」

はッ♡
はッ♡

むしゃ

しゅ♡
しゅ♡





「ひぐっ♡んんっ♡裕も見ないでえ♡
こんな姿見られたら私…っ♡」

「…っ！」

「ごめんなさい…愛してるのは貴方だけなの♡
でも…でも体が疼いて我慢できなくてっ♡」

しゅ♡ん♡しゅ♡ん♡

はっ♡はっ♡

むしゅ♡

ん♡ん♡



「ひぁあつ♡あ、ああつ♡だ、だめえ♡今、裕也と話してるのに…♡」

「あ、んああつ♡裕也に見られてるのに気持ちいいの止まらないよっ♡」

「…大丈夫だよ志穂。君が俺の事を愛してくれてるなら、俺は今の君の事も受け入れるよ」

「あ♡ゆうやあ♡」

はっ♡
はっ♡

あ♡あ♡

むいっ♡

ん♡



「好き♡好き♡愛してるの♡
裕也のこと一番♡」

「ああ、俺もだ。愛してるよ志穂」

「あ♡ああああ♡♡♡」

あ♡あ♡あ♡

は♡は♡

あ♡あ♡

あ♡

































































